

Rehabilitation in Acute COVID-19 Patients: A Japanese Retrospective, Observational, Multi-Institutional Survey.

Yamada Y, Kawakami M, Tashiro S, Omori M, Matsuura D, Abe R, Osada M, Tashima H, Shimomura T, Mori N, Wada A, Ishikawa A, Tsuji T.

Arch Phys Med Rehabil. 2022 May;103(5):929-936.

背景) 2019年12月から、全世界的にコロナウイルス感染症が猛威をふるっている。COVID-19の罹患により、呼吸器の障害のみならず、骨格筋量の低下、身体機能の低下、日常生活動作能力の低下などを引き起こすことが知られており、リハビリテーションの必要性は明らかであるが、いつ、どの程度の介入を行うべきか、療法士への二次感染の可能性はどうか、リハビリテーションに有効な介入は何かなど、不明な点が多いのが現状であった。また国により流行状況、医療体制、物的資源が異なるため、適切な介入方法は国によって異なることが予想された。

目的) 本邦におけるCOVID-19患者に対するリハビリテーション医療の状況を把握するために、COVID-19患者におけるリハビリテーションの状況と日常生活動作(ADL)の変化・摂食状況の変化、リハビリテーションに影響を与えた要因について調査した。

対象) 2020年9月30日までに、集中治療室を有する急性期5病院のCOVID-19患者478人であった。

結果) 死亡した患者を除く重症患者のうち、退院時に自立歩行できた患者の割合は63%、退院時に3食を経口摂取できた患者の割合は90%であった。リハビリテーションは全患者の13.4%、特に重篤な症状の患者の58.3%に実施されていた。リハビリテーション介入開始時に陽性であることが判明していた症例から担当セラピストへの二次感染はなかった。5病院中4つの病院が、何らかの理由(リハスタッフが足りない、感染防護具が足りないなど)で通常のリハビリテーション提供自体が困難(一時的なトリアージや中止、延期など)となった事態に直面していた。